



目次

- P1 春季企画展開幕！ 関連イベント大盛況
- P2 「太田明写真展」開催
写真家・太田明さんが撮影した一期一会の風景
- P2 「あん」上映会、テレビ局ディレクターの講演会を開催

- P3 資料紹介 その④
写真パネル「湯之沢の患者集落」
- P3 研究から ハンセン病と在日朝鮮人
- P4 「名誉回復及び追悼の日」式典とハンセン病問題対策協議会開催
- P4 お知らせ／利用案内

春季企画展開幕！ 関連イベント大盛況

4月27日（土）、春季企画展「キャンバスに集う～菊池恵楓園・金陽会絵画展」が開幕しました。今回の企画展は、初めて資料館に訪れるお客様に大勢お越しいただいています。企画展とあわせ、さまざまな付帯事業を開催しています。

◆オープニングセレモニー～クラシックコンサート

初日午前、映像ホールでは、当館と同じ西武線沿線の国立音楽大学学生による弦楽四重奏ユニット「Quartetto Piacere」の演奏会を開催。平沢保治・多磨全生園入所者自治会会長や渡部尚・東村山市長も駆けつけてくださいました。演奏は井川璃理さん、佐藤麻里さん、根岸彩和さん、田中麻衣さん。「展覧会の絵」などの演奏が企画展開幕を盛り上げました。午後には、企画展示室に場を移して、佐藤麻里さんによるヴァイオリン独奏を聴きながら、大勢のお客様に作品をご鑑賞いただきました。

◆ワークショップ「キャンバスにあつまれ！」

5月5日（日・祝）には、美術家・田川誠さんによるワークショップを行いました。9メートルものターポリンシートを1枚のキャンバスに見立て、約50人の参加者がそれぞれに絵を描き、最後に田川さんがひとつの作品に仕上げました。親子での参加者も多く、年齢、病歴、性別などを超えて多様な人々が集うイベントとなりました。

みんなでつくりあげた作品は、5月26日（日）までギャラリーに展示され、多くの方にご覧いただき

ました。

◆トーク企画「生きるための絵」

6月1日（土）映像ホールで、荒井裕樹さん（二松學舎大学准教授。専門は障害者文化論）によるトーク企画を開催。「誰でも深刻な経験は言葉にできない」と指摘し、「金陽会の作家たちも、言葉にできない思いを絵筆に託したのでは」と論じました。

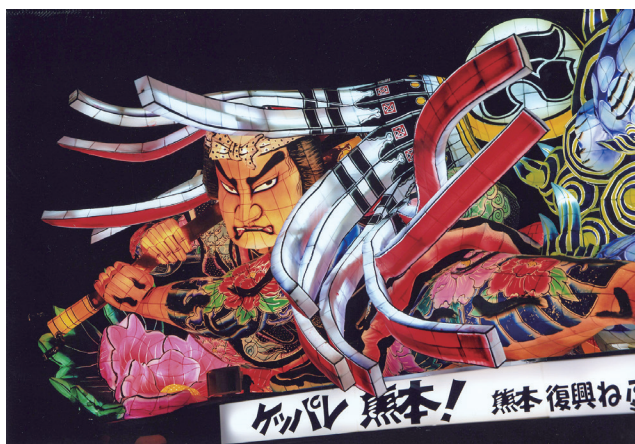
◆講演会「金陽会の作家たち、その素顔」

6月8日（土）映像ホールで、太田明さん（菊池恵楓園入所者自治会副会長、一般社団法人金陽会理事）による講演会を開催。作家たち一人ひとりの思い出をふりかえり、「絶対隔離という闇の中で、絵を描くことだけが、この世に生を受けた自己の存在を示す方法だった」と論じました。講演会につづきエロイカ・トリオによる木管三重奏のクラシック・コンサートもお楽しみいただきました。



企画展は、7月31日（水）までつづきます。皆様のご来場をお待ちしています！（木村哲也）

「太田明写真展」開催 写真家・太田明さんが撮影した 一期一会の風景



写真「復興ねぶた」2016年9月

当館では、「太田明写真展」を5月30日（木）から6月12日（水）まで開催しました。太田さんは、写真家として約30年の経歴をもち、菊池恵楓園内の写真愛好家サークルであるカメラ会の代表として活躍してきました。

本展では、太田さんの近作のなかから、太田さんの出身地・熊本の自然や色彩豊かな伝統的祭礼、熊本地震から復興途上にある地域の様子などを活写した20点を厳選し、みなさまにご覧いただきました。

今回展示した作品のひとつ、「復興ねぶた」は、2016年の熊本地震の復興を願って青森から熊本にやってきたねぶたを撮影したもので、各地域で開催されるイベント情報をつぶさにキャッチし、撮影に出掛ける太田さんの写真家としての心意気を感じる作品です。

また、本展は春季企画展「キャンバスに集う～菊池恵楓園・金陽会絵画展」会期中の関連イベント・太田明さんによる講演会「金陽会の作家たち、その素顔」の開催に合わせて、企画したものでした。企画展では金陽会の作品を表紙にあしらった菊池恵楓園の園内誌『菊池野』を紹介していますが、近年の『菊池野』の表紙絵は、金陽会の絵画とカメラ会の写真を隔年交代で掲載しています。

本展を通して、金陽会のような絵画サークルとならび、療養所のなかでの生きがいという点で重要な意味をもつ写真サークルの活動の一端を知る機会といただければ幸いです。（橋本彩香）

「あん」上映会、テレビ局ディレクターの講演会を開催

当館では、多くの方に資料館に足を運んでいただくきっかけ作りをかねて、さまざまなイベントを実施しています。特に、ハンセン病問題への関心が低い方や、若い方に興味を持っていただけるような企画を心がけています。

5月6日（月・祝）には、ハンセン病問題を題材とした映画「あん」の上映会を行いました。各地で何度も上映会が行われていますが、資料館では初めてとなります。当日は開場前から長い列ができ、満席となりました。ご入場をお断りしたお客様もいらっしゃる、大変心苦しく感じております。映画をご覧になったお客様からは、「“知らない”ということ自体が罪だと思いました」、「“生きる意味”を見出したというシーンにはとても感動しました」といった多くの感想が寄せられました。

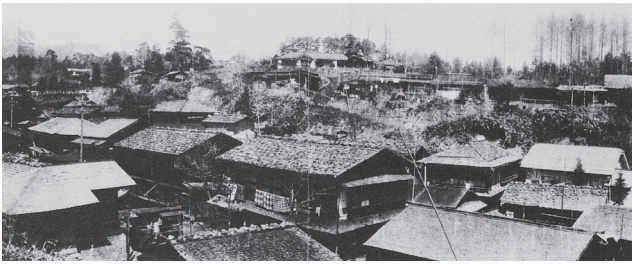
6月30日（日）には、三重テレビ放送のおわひでゆき小川秀幸さんをお招きして、「報道マンに訪れた“人間回復”～ハンセン病回復者との出会いから」と題する講演会を開催しました。小川さんは講演のなかで、ギャラクシー賞受賞番組の「大ちゃんと為さん～あるまじの風景」の一部を紹介しつつ、三重県出身のハンセン病回復者や患者の収容に携わった県庁の担当官を取材した経験などをお話しし、マスコミが責任を果たしてこなかった反省について触れました。そして、入所者と接する中で自身が変わっていったことを強調しました。

今後も、ハンセン病問題に取り組んでいるさまざまな職業の方のお話をうかがうイベントを企画していく予定です。（大高俊一郎）



資料紹介 その④

写真パネル「湯之沢の患者集落」



群馬県の草津温泉には、かつて湯之沢と呼ばれた地区がありました。日本に療養所ができる前から、ここには草津の湯がハンセン病治療に有効だと信じて集まった患者の集落が存在しました。今回は「湯之沢の患者集落」の写真パネルを紹介します。

草津温泉に患者が集まるきっかけのひとつは、1869（明治2）年の大火から復興するため、ハンセン病への効能を謳ったことでした。その後上町と下町に分け、患者の入湯区域を下町としました。これが1887（明治20）年頃湯之沢の集落となり、患者が集住し、また治療に訪れる患者を相手に宿屋や商店を営むようになりました。やがて賭博の元締めでもある「自治団体」や宿屋組合ができて権力を握り、真宗やキリスト教の布教を阻むこともありました。コンウォール・リーがバルナバミッションを作ったのは、1916（大正5）年以降のことです。

この写真は、重監房資料館と栗生楽泉園社会交流会館によると、現在の草津熱帯園の駐車場付近から北西方向を写したものだそうです。1927（昭和2）年の撮影で、中央奥の高台には聖バルナバ医院が写っています。その手前には不鮮明ながら、右に富山館、左に昭和館という宿屋が見て取れます。右端の白い屋根の洋館は、『御座の湯口碑』によるとホーリネス教会、中央のふとんを干している大きな2階建ての家は、朝日館という宿屋と思われます。その周りの家々は、どれも民家です。左の奥には白根山がうっすらと見えます。

建物はどれも立派で、まさに町と呼ぶにふさわしい様相です。1942（昭和17）年、全戸が栗生楽泉園に移住し湯之沢は解散しますが、それは町をまるごと収容するものだったことがわかります。

（稲葉上道）

研究から

ハンセン病と在日朝鮮人

当館の常設展示室の証言映像コーナーでは国内外あわせて64名の方々の証言を聞くことができます。ハンセン病回復者としての人生は、当然ですが一様ではありません。その中のお一人である金泰九^{キムテグ}さんは、在日朝鮮人入所者として生きた自身の想いを語っています。

全国の療養所には日本人入所者だけではなく、朝鮮半島をルーツとする在日朝鮮人の方々も共に暮らしてきました。多い時には全国に700人以上の在日朝鮮人が入所しており、中には全入所者の一割を占める園もありました。発病率が日本人と比べ高かったのは、ハンセン病が栄養や衛生状態が悪い場所で発病する可能性が高く、植民地支配下において生活水準を低く押し下げられていたためだと考えられています。

終戦後も彼ら、彼女らにとっては「解放」にはなりませんでした。戦後も日本のハンセン病政策下にあっただけではなく、出入国管理令による「強制送還」の危惧と、祖国の分断による一時的な思想対立、国民年金法施行によって生み出された深刻な経済格差等、病との闘いだけではなく、社会的差別との闘いにその命を燃やさなければならなかったのです。

療養所は様々な背景を持つ人々が生活を共にしてきた場所であり、共に闘って自らの権利を獲得してきた歴史があります。日本社会の縮図ともいえるこの場所で生きた方々の記憶を記録し、調査、研究を重ねて多くの皆さまに知っていただくこともまた当館の大切な役割だと思っています。（金貴粉）



「ハングル講座」(多磨全生園) 1960年代 撮影・趙根在

「名誉回復及び追悼の日」式典と ハンセン病問題対策協議会開催

6月21日（金）午前11時より、「らい予防法による被害者の名誉回復及び追悼の日」式典が厚生労働省にて行われました。同省正面玄関近くの「追悼の碑」に、根本 匠 厚生労働大臣、西村康稔内閣官房副長官、大島理森衆議院議長、山下貴司法務大臣、今崎幸彦最高裁判所事務総長ら、続いて志村 康 全原協会長、森和男全療協会長、遺族代表らが献花し、その後講堂内でハンセン病療養所における物故者27,191人の御霊に参列者が黙祷を捧げました。

続いて厚生労働大臣が式辞を、安倍晋三総理大臣（西村内閣官房副長官代読）、衆参両院議長、山下法務大臣が主催者として挨拶を行い、患者、元患者およびそのご家族への謝罪と反省の意とともに、医療と福祉の維持、名誉回復、誤った認識の是正に向けた決意を表しました。大島衆議院議長は優生保護法による被害についても謝罪しました。次に、来賓より金子恭之ハンセン病対策議員懇談会会長、森山裕ハンセン病問題の最終解決を進める国会議員懇談会会長（玉木雄一郎顧問代読）、志村全原協会長（豎山勲 事務局長代読）、森全療協会長、遺族代表が挨拶し、偏見・差別の解消、医療と生活の安定（特に療養所職員の処遇改善および欠員への対応）、ハンセン病資料館の運営の適正化などが要求されました。今年は式典に、都道府県知事および13療養所所在12市町の首長も参列しました（代理含む）。

午後2時から、霞が関ビル35階東海大学校友会館・望星の間において、令和元年度ハンセン病問題対策協議会が開催されました。統一交渉団が提出した「統一要求書」には議題として(1)謝罪・名誉回復について、(2)社会復帰・社会内生活支援、(3)在園保障、(4)真相究明、(5)将来構想、(6)国立ハンセン病資料館の運営について、が挙げられ、大口善徳厚生労働副大臣の進行のもと、厚生労働省との協議が行われました。今年は特に在園保障の問題（医師をはじめ職員の不足）の解決が求められました。確認事項については後日、厚生労働省のホームページ等で公開の予定です。（西浦直子）

※「資料館の現場から」はお休みします

お知らせ

■このたび、SNSにて国立ハンセン病資料館のイベント開催情報や関連情報の発信を開始しました！
また、YouTubeチャンネルを開設し、過去のイベントや語り部ビデオを順次公開しています！
公式ツイッター：<https://twitter.com/hansensdiseasem>
公式フェイスブック：
<https://www.facebook.com/hansensdiseasemuseum/>
国立ハンセン病資料館YouTubeチャンネル：
<https://www.youtube.com/channel/UC-gp-oP50g4m5865iTiFCFQ>

■ハンセン病と人権 夏期セミナー

日時：7月26日（金）10時より

場所：映像ホール・展示室

申込：当館HPより事前申込

■夏期期間中（7月～8月）は、夏休み自由研究応援企画や映画上映会、講演会などたくさんのイベントを企画しています！詳細は当館HPやチラシ・ポスターなどをご覧ください！

利用案内

■開館時間 9：30～16：30（入館は16：00まで）

■休館日 毎週月曜日（祝日の場合は開館）
年末年始、国民の祝日の翌日、
館内整理日

■入館 無料

■交通

- ・西武池袋線 清瀬駅南口より
西武バス「久米川駅北口」行バスで約10分
（「ハンセン病資料館」下車）
- ・西武新宿線 久米川駅北口より
西武バス「清瀬駅南口」行バスで約20分
（「ハンセン病資料館」下車）
- ・JR武蔵野線 新秋津駅より
西武バス「久米川駅北口」行バスで約10分
（「全生園前」下車、徒歩10分）
または徒歩約20分

〒189-0002 東京都東村山市青葉町4-1-13
TEL 042-396-2909 FAX 042-396-2981
URL <http://www.hansen-dis.jp>